

やまとうじゆうを記念する会ニース

一年かかりで準備していた「平塚らいでうを記念する会」の発足総会が五月二三日に開かれました。第一回ニュースをお届けします。（記念講演、あいさつの要旨をご紹介します。文責・編集部）

日本女子大学学長をはじめ、各界各層を代表する方が、男性もふくめて発起人に加わってくださり、今日の「らいでうを記念する会」の発足となつた。

二〇年近くも大阪・吹田市の「婦人のいえ」に預けたままになつたいるらいてうの遺品。その保存会会長の小松ときさんからは「何よりも、らいてうの遺品が納まるべき場を得られることを喜ぶ」とのメッセージが届いた。また日々の遺品やパネルの整理、保管、「らいてう展」の貸し出しなどにお骨折りいただいたいる城ゆきさんには、心から感謝しながら、もっと早く東京に納めるべきだったと遅すぎた提案を反省。ひそかに、らいてう

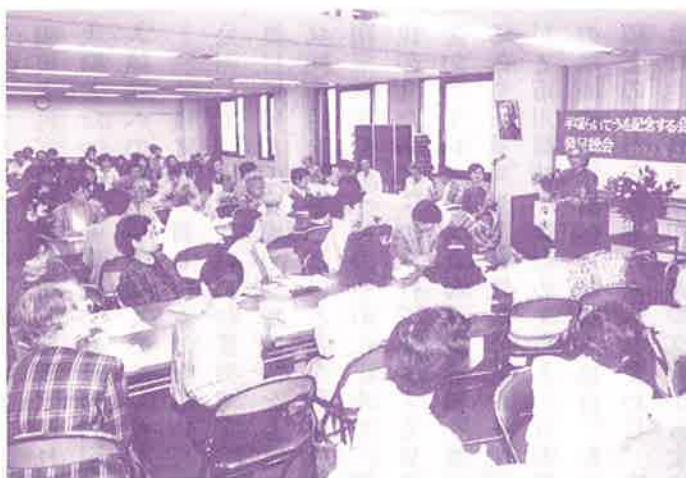
「夢」にいどむ

（開会あいさつ）
櫛田 ふき

日本婦人回憶選合會長

昨年の「らいてう没後二〇年『青鞆』発刊八〇年記念のつどい」から丸一年。「すばらしい企画をありがとう」「こ

な集いをまた開いてほしい」「ぜひ、ら
いてう記念館を!」等々。寄せられたア
ンケートに励まされ、何とか要望に応え
たいと、私たちはあれから毎月集つて相
談を重ねてきた。



100人参加した会場。挨拶している櫛田さん。

「らいてう展」を「野鳥展?」と思う若い女性がふえている今、彼女たちにこそ、らいてうの足跡を知らせていきたい。婦団連の創立者であり、日本母親大会の生みの親でもある、らいてうの記念館づくりに力を入れたいと思う。

らいてうが生れ育った活動の地、東京なかでも、らいてうが生涯でもっとも長く暮らし、終の住処となつた世田谷区がその地にふさわしいのではないか——。みんなさんのお力添えをいただきながら、ぜひとも実現したいと思っている。

現代に生きるらいとう

〈記念講演〉 青木 生子
日本女子大学学長



平塚らいてうは日本女子大の卒業生であつても、同窓会名簿にその名は記録されていない。それは森田草平と塩原で心中未遂事件をおこしたスキヤンダラスな女として非難、攻撃され、同窓会は母校の名を傷つけたとして除名。生涯、復権されなかつた。それが、らいてう没後二年目、あれから八四年ぶりにこの四月二九日、同窓会「桜風会」の理事会で除名解除、復権した。

二二才の若さで、あの屈辱に屈しなかつたらいてうは、だが事件の一方の当事者である男性の森田草平が、これをテーマに小説を書き、新進作家として世に出るチャンスを掴んだ。三年後発刊された「青鞆」の人間宣言には、あの時の屈辱的な現実体験がじみ出ていると思う。また「青鞆」は一周年も迎えないうちに、

この人は熱烈な平和主義者でした。ケイは「一切の婦人運動は平和運動をもつて完結する」ということを言っています。

らいてうは大正九年、新婦人協会をつくり、運動目標の中に婦人参政権の要求をかかげますが、なぜ女性に参政権が必要かという請願要望書（一五項目）の中には、平和のために必要なだと明記しています。これは、らいてうという人がいわゆる戦後、思想的に豹変したかのようにいう人もいますが、らいてうの民主

わたしたちの先輩にあたる女性たち、特に今よりも遙かに「女であること」が窮屈で不自由であったあの時代に、平塚らいてうと、そうして、彼女とネットワークを結んだ女たちが、どんな暮らしの中で何を夢見、何を理想とし、彼女たちの「これまで」を残すために何をどのように達成し得たもの、し残したもの、あるいは、次の時代への宿題として残したもの、それぞれの「わたし」が、今をより深

ジャーナリズムから”新しい女”と揶揄、嘲笑され、攻撃された。だが、これが導

火線となつて、「青鞆」は社会問題、婦人問題への色合いを濃くしていく。

らいとうと平和

〈記念講演〉 小林登美枝
らいとう研究家



なぜ今平和についてお話しするのかといえば、これからの日本の進路の重要な選択が行なわれる時期に、らいとうが平和をどう考えていたかを、知つてほしいと思ったからです。新憲法ができたとき、らいとう六歳。亡くなる八五歳までの二五年間らいてうの中心は、世界恒久平和をいかにして実現していくか、でした。

憲法前文ないし九条。らいとうは世界唯一の非武装国の女性の立場、役割は大きいと常々言つっていました。「青鞆」はもちろん個人主義、自我の覚醒からはじまっていくわけですが、その行き来の中には、女性の人の権の回復、民主主義。その点らいてうは「青鞆」の出发点で民主主義者であったわけです。らいとうは、スウェーデンの思想家エレン・ケイから多くを学んだわけですが、

「群像」の道を歩く

〈閉会あいさつ〉 米田佐代子
山梨短期大学教授



さいごにらいとうの言葉「生きることは行動すること。ただ呼吸することではない」をご紹介して終ります。

戦後、野上弥生子、上代たの、植村環ガンドレット・恒子さんらを説いて「非武装国日本女性の講話問題についての希望要項」をダレス国務長官に手交したのも、初めて社会主義国を訪問、帰国した高良とみさんを歓迎。平和の意思をもつ日本婦人団体連合会の結成をよびかけたのも、らいとうです。

く、より豊かに生きるためにも、また、次の世代が、そこから何かを引き出し学びるためにも、記念館という具体的な形として彼女たちの「これまで」を残すことができたら……。どんなに素晴らしいことでしょう。

さうやく没後二年たって「らいとうを記念する会」ができ、記念館を！と気の遠くなれるような話ですが、考えてみると皆さんと一緒にゼロから始めようという、これは大変意味あることのようです。

一つには、女性は天の半分などといわれながら、マスコミも含めてまだまだ女性のしてきた業跡が正当に評価、復権されていない。日本女子大同窓会が青木先生方のご努力で、除名解除、復権されたというのも、いまがチャンス、そういう時代に私たちが生きあわせているわけで、たいへん意義に叶っていると思います。もう一つは、確かにらいとうは女性史の中で知らぬ人はいない立派な人です。

だが、らいてうもまた、その時代の多

勢の中の一人であったということ。私ど

もは今ささやかな勉強会で「青鞆の女た

ち」というテーマで勉強していますが、

与謝野晶子や伊藤野枝らについては知ら

れています、「青鞆」にはまだまだ多数

の女性が登場しています。それが世の不

合理、家族制度や子育てなどの仕事の中

で埋もれていたことなどを考えると、

らいてうの生涯はそういう時代の人びと

と共にあるのだということ、そういう人

びとを含めて私どもは時代の女たちを記

念する。それはとりもなおさず今日の私

たちが、一人ひとり精一杯生きながら、

群像として生きている自分自身を記念することにもなるのではないか。

私は最近、歴史を捉える目として、群像の歴史学という言葉にひかれていました。らいてうの時代は、まさに厳しい差別と軍国主義、天皇制の厳しい時代ですが、らいてうも群像の道を歩こうとしていた女たちの一人だったと考へるなら、決して過去の記憶にふけるのではなく、私どももまた、容易ならぬ時代に生きていることを考へるなら、文字通り群像として生きていく砦として、らいてうを記念し、記念館をつくるという仕事は、皆の力でぜひとも実現していきたいと思ひます。

☆総会報告

発会総会は一時半から東京・損保会館で開かれ、近県から一〇〇名が参加しました。

佐藤真子さんのうた「原始女性は太陽であった」で開幕。司会は井上美代、開会あいさつ櫛田ふき、記念講演は青木生子、小林登美枝のみなさんで、それぞれ大きな感動を呼びました。

世話人

櫛田ふき（代表）

石井あや子 石川和

子 井上美代 浦辺史 折井美耶子 小

林登美枝 猿橋勝子 城ゆき 白井雅子

関屋綾子 瀬長フミ 立松隆子 富永和

重 永原和子 野末悦子 橋本宏子 林

光 広田寿子 間島路子 植井登女尾

松崎浜子 米田佐代子 米原美智子 湯

川スミ 渡辺敬子

（五〇音順）

賛同者

相賀孝子 安達絹恵 新井千織子 飯田

泰子 伊藤直子 井上美穂子 岩田綾子

大原詮子 折井美耶子 鹿島光代

加藤トミ子 梶淵智子 木村恵子 木村

寿美子 熊谷直子 小島章子 児島せの

子 塚川宏子 佐藤真子 猿橋勝子 島

村革子 重田統子 杉浦希子 鈴木初江

建部由美子 宝井琴桜 徳田克子 烏井

衡子 中川晶輝 中森謹重 南川よし子

橋本宏子 林光 菱沼淳子 福島県女性

のあゆみ研究会 松田麻子 宮古みどり

宮崎礼子 村田静子 守谷武子 山口美

代子 矢崎治子 柳沢節子 矢野蓮枝

吉岡真美 吉本洋子 脇美智子 渡辺敬

子 若井稔・操 和田典子（五月二三日）